

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

# COCONUTS CLUB

September 9  
2022

商店春夏秋冬





# 商店 春夏秋冬

コンビニ、ドラッグストア、百均ショップが隆盛を極める今、個人経営の小さな商店の影は薄い。そんな時代にあっても、地域の人々に愛され続けている店がある。古いけれど懐かしくてほっとする、そんな商店を訪ねてみた。



## 豊丘の老舗商店今なお健在

ドラえもんに出てくるガキ大将、ジャイアンの実家が「剛田雑貨店」という商店を営んでいることは有名だ。雑貨とは「こまごまとした日用品」の意味で、雑貨屋は日常生活で使われるあらゆるものが売られている店。スネ夫と一緒にのび太をからかっている最中に、怒った母ちゃんがやってきて「店の手伝いをしろ！」と耳を引っ張られながら家に連れ戻されるシーンが定番で、その後ジャイアンは仕入れた商品を整理したり配達に行ったりしていたのだろう。

ドラえもんの連載が始まったのは昭和四十四年（一九六九）。その頃、雑貨屋は町でも田舎でもありふれた存在で、漫画に登場しても何の違和感もなかった。たとえば、同じ時期に師崎商工会が作成した師崎・片名大井の会員名簿によると、業種別に「雑貨」と記された店はなんと十七店を数える。しかし、時代が変わり見かけることも減多になくなってしまった。

だ品揃えは雑貨屋の名にふさわしい。店主の鈴木重子さんに聞くと、今も地元の人がよく買い物に訪れ、盆と正月や祭礼時には酒の注文もあるので、定期的に商品の補充をしているという。

その一方で、何十年前前に仕入れたものの売れないまま残ったデッドストック品も豊富だ。缶切り、定規、版画用の彫刻刀、万年筆のインク、箸、鍋、靴磨きのブラシ、歯ブラシ、ヤニ取り歯磨き粉、銚子、ランチジャーと懐かしの品々を次々に見せてくれた。重子さんは戦争末期の昭和二十年（一九四五）生まれで、二十歳の時から家業に携わってきた。「私から子供の頃は家具も売っていて、店の二階には成岩のフタワ家具から仕入れた箆筒が置いてあったねえ」と往時を振り返る。さすがに家具は残っていないが、雑貨の枠を超えた商品を扱っていたことから、豊丘におけるヤマ庄の役割と存在感が窺える。

見る人が見れば「昭和のお宝」満載のこの店にはもうひとつ、かけがえのない宝がある。それは、重子さ

んの祖父で二代目店主の銀重が正時代から付けていた帳面だ。毎年上半期・下半期ごとの決算書とともに、祝い事などの贈答品や金銭のやりとり、卸売業者や仕入元の招待旅行の行き先、家のできごと、社会的トピックなどが丁寧な字で綴られている。几帳面なその内容からは、商売人である銀重の生真面目さが滲み出ている。鈴木家の家史だけでなく大正、戦前、戦後の商品の価格相場もわかり、資料価値も極めて高い。

重子さんと一緒に帳面を読み解いてみたところ、ヤマ庄の創業は明治三十五年（一九〇二）と判明した。商売を始めたのは重子さんの曾祖父の庄之助で、この人に関することは帳面にほとんど書かれておらず、どのような経緯で開業したのかまではわからない。明治二十九年（一八九六）生まれの銀重が二代目として店を継いだのは二十二歳になった大正七年（一九一八）のこと。帳面を付け始めたのはこの時からである。その後の商売は順調だったようで、四十歳をすぎた働き盛り

の銀重は昭和十五年（一九四〇）に店舗兼住居を新築する。それが今のヤマ庄の建物だ。つまり、戦前の商店建築が今なお現役なのである。

銀重の帳面を受け継いだ重子さんは、その続きを今も付け続けている。小さな商店の百年を超える歴史を物語る、唯一無二の記録だ。「二冊目がもうすぐ終わるから、もうしたら店じまいかもね」と冗談めかして重子さんは言うが、元気で三冊目に突入してほしい。

**駄菓子屋はワンダーランド！**

ヤマ庄が豊丘の老若男女に親しまれていたのに対して、河和の玉屋は地元の子供たちから絶大な人気を集めてきた商店だ。扱う品目はさまざまだが、主力は菓子と玩具。玉屋は、子供をメインターゲットに絞った「駄菓子屋」である。個人経営の駄菓子屋も、見かけることは稀になった。

店の所在地は、国道二四七号沿いの河和天神社の角から西へほんの少し入ったところ。木造平屋建ての小

さな店で、先のヤマ庄と同じく屋号がどこにも表示されていないので、地元の人でなければ一回で辿り着くのは難しいかもしれない。ここも清涼飲料水の自販機がいちおうの目印である。

引き戸をがらりと開けると、すぐ目の前に商品棚が現れる。そこに並ぶのはすべて菓子だ。その背中で側面にも棚が置かれており、こちらにも菓子がずらり。十円玉数枚で購入できる小さいものから、大手メーカーのメジャーな商品まで多種多様。昭和四十年代後半生まれの筆者が子供の頃に買っていたロングセラーもあれば、今まさに流行中のキャラクターものもあって、めくるめくおやつワールドの様相だ。菓子に混じってトレーディングカード、おもちゃ、瓶コーラなどのソフトドリンク、ガチャガチャマシン、さらに縄跳び、マスク、文房具なども並ぶ。この中で意外に売れ行きがよいのがミニサイズのカップ麺で、店の隅に置かれた電動ポットから湯を注いで店内で食べていく子供がけっこういるとか。コンビニから子供が必要とす

そんな雑貨店の希少な生き残りが南知多町豊丘にある。店の名は「ヤマ庄」。県道二八〇号沿いの海っ子バス乙方バス停前に建つ木造二階建てがそれだ。外に屋号を記した看板が出ていないので見過ごしそうになるが、清涼飲料水の自販機と昔ながらのたばこ陳列棚が目印である。昨夏放映の「世間遺産」に登場したので、覚えていた読者も多いだろう。

店に入ると、なんとも言えず懐かしい気持ちが入り込ませる。新しいものは奥の壁に鎮座する冷蔵庫と商品ポスターくらい。床は三和土、天井は木、レジの前には大きな火鉢。そして、年季の入った陳列棚やシヨーカー。店内は狭いが、それらがバランスよく配置されているため移動は容易で、目当ての品が見つけやすくかついるのはスーパーやコンビニと同じだ。

商品のラインナップを見てみると、袋菓子、たまり、日本酒、洋酒、ジュース、食用油、洗剤、石鹸、トイレトペーパー、ティッシュペーパー、束子、種、煙草、ノート、ガムテープ、線香、蝋燭などなど。バラエティに富ん



る要素だけを抽出したかのような店で、大人も気分が上がること請け合いである。

長年にわたり玉屋を切り盛りしてきた、昭和十五年（一九四〇）生まれの岸田きく乃さんに聞くと、店は昭和十年（一九三五）頃に祖父の伯金が創業したという。伯金は豊丘の山田の生まれで、結婚を機に妻の在所の河和で商売を始めた。店名の由来は出身地のヤマダの逆さ読み……という話をきく乃さんはむかし祖父から聞いたそうだが、本当かどうかはわからない。創業当初は現在地のすぐ裏に店を構え、程なくして今の場所に店と住居が建てられた。この店もまた、戦前の商店建築を今に伝える貴重な文化遺産である。

昔は菓子だけでなく、なんでも扱う雑貨屋だった。軒下の「クローバーあみ針」の看板や、店内の柱に取り付けてある東芝ランプのキャラクター入りテスト用ソケットなど、駄菓子屋らしからぬアイテムはその名残り。煙草だけは近くに煙草屋があったので売ることができな

かったが（競合店との距離が近すぎると認可されなかった）、特に扱う品目を限っていたわけではなく、客の要望があれば何でも仕入れた。糸やボタンは、自宅で縫物をする人が多かった時代にはよく売れ、「子供が『明日、学校に雑巾を持って行かなきゃならない』って急に言うもんだから……って、慌てて糸を買いに来るお母さんも多かったね」ときく乃さん。雑巾は今や、百均ショップで買うものだ。

そんなわけで多くの世代が利用する店だったが、地元ではやはり玉屋といえば小・中学生御用達のイメージが強いようだ。とりわけ賑わったのは遠足の前日。昔の遠足は「〇百円以内のおやつ持参OK」というのが全国の共通ルール（？）で、それを買いに子供たちが玉屋の前に参集したとか。きく乃さんの息子が昭和四十四年（一九六九）生まれの賢典さんは「その日はやはり店の前に行列ができて、外にまで商品を並べて在庫一掃セールのようにしたよ。小学生だった自分も親を手伝って金勘定してましたね」と笑う。

しかし、昭和五十年代に入り美浜町にもショッピングセンターが進出してきた頃から、河和の個人商店の雲行きが怪しくなってくる。玉屋も例外ではなかったが、敷居の低い駄菓子屋は子供たちに必要とされ続け、それが店を継続する原動力になった。かつての常連が大人になって自分の子供を連れて来店することもあるそうで、河和っ子の子供時代の思い出には必ず玉屋が存在するのだ。そして令和になった今でも、玉屋に足繁く通う子供は多い。馴染みのおばちゃんがいる、子供だけで気兼ねなく買い物ができ、友達と気ままにすごせる玉屋は、子供にとって解放区のような存在なのであろう。

みんなの笑顔が咲く場所は

最後に新参の駄菓子屋を紹介したい。常滑・本町通りの「みんなの縁がわ」にて日時限定で開かれる「みんなのだがしやさん」である。

本誌2018年10月号でも取り上げたみんなの縁がわは、コミュニ

ティサロンとレンタルスペースが融合した「場所」であり、そこに集まる人々がゆるやかに結びつくことで地域づくりを進めていく「活動体」だ。明治十一年（一八七八）に創業した豊田屋酒店の旧店舗をそのまま活用し、カフェ、塾、整体サロン、教室、サークルなどを参加者がそれぞれに運営しつつ、縁日やライブなどの自主イベントも開催してきた。代表は豊田屋五代目の渡辺美佐さんで、平成二十六年（二〇一四）にスタートさせた。

縁がわの運営は順調で、子供から高齢者まで幅広い世代が気軽に立ち寄れる空間として年々認知度も高まっていったが、思わぬ障壁が立ちはだかる。令和二年（二〇二〇）の一月頃から世界を襲い、いまだ終息していない新型コロナウイルスである。人が繋がる場所を目指した縁がわにとって、人が集えない状況は、存在意義を揺るがした。活動が何もできない中で渡辺さんは「いつかコロナ禍が落ち着いた時、縁がわは何ができるだろうか」と自問する。出口が見えず、行動が制限

される中で悶々鬱々としているのは大人も子供も同じ。ならば、せめて子供には少しでも楽しみを与えてあげられないか。

そこで思いついたのが駄菓子屋である。超安価な駄菓子で利益など出るわけではないのでもとより採算は度外視だが、コロナ禍において駄菓子屋は「密を生じさせないように人を集める」という矛盾をクリアできる仕組みなのではないか、という直感があった。小さな菓子メーカーや問屋が集まる名古屋市西区で大量の駄菓子を仕入れ、それらを縁がわに並べ始めたのは、世の中が少し落ち着きを取り戻した令和三年（二〇二二）五月。営業日は書道教室とピアノ教室で多くの子供が入りする月曜日と金曜日の夕方にした。

狙いどおり、駄菓子は子供たちの心を鷲掴みにした。習い事を終えた子供たちは目を輝かせて駄菓子選びに興じ、習い事をしていない近所の子供たちも、噂を聞きつけて顔を出すようになった。決まった時間に子供がどっと押し寄せたり



いつまでも留まったりすることもなく、ほどよい人数とほどよい滞在時間を保ちながら、ゆるやかに閉店までの時間が過ぎてゆく。

駄菓子屋が定着してくると、子供たちと店番のおばちゃんはいつしか顔馴染みになった。「あのお菓子はなの？」とリクエストしたり、学校のできごとを聞いてもらおうと積極的に話し掛けてくる子も現れるようになったという。個人商店全盛の時代には当たり前だった「人と会話して買い物をする」風景が、逆境の中から生まれたこの店によってよみがえったのだ。

かつて町や村の小さな商店は、世代を超えたコミュニケーションの場でもあった。現代に生きる私たちが個人商店に惹かれるのは、単なるノスタルジーではなく、地域の中での繋がりを持ちたいという心理が深層で働いているからではないだろうか。常滑の片隅で行われている「みんなののだがしやさん」というささやかな取り組みは、商店が本来持っていたそんな価値に気付かせてくれるのである。

小さな商店での買い物は、ささやかな幸せをもたらししてくれる。

